

## 和歌山・慈尊院の密教法具について

\* 羽 良 朝 風

## 要 旨

和歌山県九度山町に所在する慈尊院は、弘法大師空海とその母公に由緒のある寺院で、ここにはいくつかの注目すべき密教法具が伝来する。

今回調査の対象とした密教法具は、いずれも現存遺品が少ない形式や細部意匠を持つ作例である。金銅独鈷杵は「鬼面・鬼目式」という特異な形式を持つ。金銅五鈷杵は、仏舍利を埋納したと考えられる埋金の跡が見られ、これは空海請来の五鈷杵にも見られる。金銅五鈷種字鈴は、作例のない種字鈴である。金銅三鈷鈴は、特異な三鈷を持ち、大陸からの請来品と考えられる。飲食器は、空海の母公の「菌」が奉籠されたという伝承を持つ。

また法具は、形式等から鎌倉時代から室町時代の製作と考えられるが、中世の史料が少ない慈尊院において、その間の事情を物語る重要なものがある。特殊な形式を持つ作例が多いことは、慈尊院が中・近世において真言密教の有力寺院であったことを示す。

キーワード：密教法具 金剛鈴 金剛杵 慈尊院

## はじめに

慈尊院は、高野山山麓の和歌山県伊都郡九度山町に所在する寺院である。開祖は弘法大師空海と伝えられ、空海の母公が晩年を過ごしたことで知られる。慈尊とは弥勒菩薩の別名で、慈尊院の本尊である弥勒仏を篤く信仰した母公がその功德により弥勒菩薩に化身したという伝承から、慈尊院と呼ばれるようになったのである。また、女性の高野山参りは慈尊院までという認識から、現在も女人高野として親しまれている。

高野山と同時に開創されたと伝える慈尊院には、高野山の政所が置かれ、冬期の避難修行の場としても重要な拠点であった。また、高野山参詣者のために、高野山上の根本大塔まで一町ごとに建つ町石があり、慈尊院にはその出発点となる町石が建っている。境内は国の史跡に指定され、高野山町石道と慈尊院は「紀伊山地の霊場と参詣道」の一部として、世界文化遺産に登録されている。

本尊である木造弥勒仏坐像は平安時代の造立で国宝に指定されており、本尊が安置されている弥勒堂は重要文化財である。本尊の裳前の後補部分には、寛平四年（八九一）の墨書銘がある。

今回、慈尊院に所蔵されているいくつかの密教法具について調査をする機会を得たので、調査の概要と若干の考察を述べたい。

## 第一章 調査報告と考察

### ① 金銅独鉈杵 一口 長 二二・八

銅鍍造鍍金の独鉈杵である（図1）。把の中央四方に正逆交互の鬼面を付ける。鬼面の左右に繩目の紐を廻らし、さらに楕円形二重の鬼目を四方に付ける。その左右に間弁付き単弁八葉の蓮弁帯を配し、二本の紐で締める。蓮弁先の蕊は鬼目側のみ毛彫りし、鬼面側には刻まない。鉈は断面が方形で、蓮弁帯側にくびれを入れ、輪郭を残して浅く彫りくぼめ、わずかに匙面を取る。四方に配する鬼目と鉈面の位置と、鬼面と鉈の棟の位置がそれぞれ対応する。

鬼面と鬼目の突出は強く、蓮弁の表現も整美であるが、二本の紐はやや太めで総じて重厚な感覚が全体を覆っている。これに類似する例は、いずれも鎌倉時代の製作である、奈良国立博物館、奈良・能満院（図2）、ドイツ・ケルン東洋美術館の金銅独鉈杵で、鬼面と鬼目の両方を与える「鬼面・鬼目式」ともいうべき作例である。形式・表現ともに近い例は、奈良国立博物館杵と能満院杵であるが、蓮弁帯を締

める紐帯がやや細めで全体に精美的な表現の奈良博杵の製作がはいと思われ、能満院のものは明快・簡潔な感覚にあふれている点が本品とよく通じている。ただし細部に目を転じると、奈良博・能満院二杵がいずれも蓮弁帯の両端に蕊を彫り、鉈面を縦長の猪目形に表して中央に鑄を立てるなど、本杵と相違する点も指摘できる。ケルン東洋美術館の品は他の二品と鉈の表現が同様だが、把部には鬼面と蓮弁帯を付けるのみである。

ところで独鉈杵ではないが、鎌倉時代の製作とされる京都・北村美術館の金鉈（図3）の細部意匠がこれらの作例のそれに酷似している。金鉈は独鉈杵の両端または片側に宝珠形を付けた形状であるが、北村美術館の品は一般的なものと比べて大型の作例である。これらの類似品は、時代が降るに従って表現が省略・簡略化されていくことがしばしばであり、その観点からすると、細部までよく整っている北村美術館の金鉈が最も古く、続いて奈良国立博物館、さらに能満院、慈尊院、ケルン東洋美術館の独鉈杵の順に製作されたと考えるのが自然なように思われる。

そもそも金鉈は、古代インドにおいて、眼病の治療具であったと考えられ、転じて仏教では無知の眼膜を除去し、智慧の目を開かせるという意をもつ道具になったものといいい、とくに密教では灌頂の儀式に使用する特別な法具となる。灌頂とは、密教の師位（阿闍梨位）を継承するための印可を与える重要な儀式であり、大阿闍梨は金鉈を用いて弟子の両眼を加持し、灌頂を受ける者の心眼を開く所作をする。



図1 金銅五鈷杵 慈尊院



図2 金銅独鈷杵 奈良・能満院 鎌倉時代



図3 金銅金鉦 京都・北村美術館 鎌倉時代



図5 金銅種子五鈷鈴  
大阪・藤田美術館  
鎌倉時代



図4 金銅種子五鈷鈴  
京都・細見美術館  
鎌倉時代

そのような金鉦の使用と意味する性格を念頭におきつつ、鬼面と鬼目の両方を表す意味について考察するにあたり、金剛鈴の鈴身側面に種子を表す「種子鈴」の場合を例に挙げてみたい。

種子鈴については岡崎讓治氏<sup>1)</sup>がすでに述べておられるように、把中央に鬼面を配する鬼面式種子鈴は胎藏界四仏を表す鈴に多く、これにたいして、金剛界は鬼面とせず鬼目式とすることが多い(図4・5)。つまり、鬼面と鬼目の両方を具えるのは、すなわち金剛界・胎藏界の両界の形式を持ち合わせたと考えることも可能と思われる。さらに他の作例より大型の北村美術館の金鉦は、灌頂という教への相承の場合



図6 金銅三鉗杵 茨城・円満寺 唐時代

で、両界にわたる教えの成就と、阿闍梨による所作をより視覚的に強調する意図で、鬼面・鬼目をともに表し、大型化したのではないだろうか。あるいは、通常の密教灌頂儀礼ではない特殊な修法に用いられた可能性もあるが、今後の課題としておきたい。

ただし、鈴身の側面に三昧耶形を表した「三昧耶鈴」の場合、関根俊一<sup>2)</sup>氏の見解にしたがって、それらが金剛四仏あるいは五仏をシンボライズしたと考えるならば、それらの鈴は把に鬼面を表すのが一般的であるから、鬼面を胎藏界に結び付けることは必ずしも妥当ではないこととなして示しておくこととする。

また、鬼面と鬼目の間に廻らす、特徴的な縄目の紐は、唐時代の製作とされる和歌山・金剛峯寺の金銅独鉗四天王鈴や茨城・円満寺(図6)の金銅三鉗杵などの請来法具にしばしば見られ、この点も注意しておきたい。

## ②金銅五鉗杵 一口 長 一六・五

銅鑄造鍍金の五鉗杵で、片方の鉗先二本が途中から欠損し、鉗の基部に何らかの圧力によって生じた亀裂がある(図7)。把は手擦れによる摩耗が著しい。鍍金は両方の鉗部にわずかに残っているが、全体に黒色を呈しており、軽く火中した可能性がある。

把部は正円形二重輪の鬼目式で、とくに注目されるのは鬼目の一部に埋金(埋栓)の痕跡(図8)のあることである。鬼目の左右には、間弁付き単弁八葉の蓮弁帯をめぐらし、これを二本の紐で締め、両端に蕊を毛彫する。鉗部は、中鉗に匙面を取らず、下方に括れを作る。脇鉗の下方に嘴形を付ける。

正円形の鬼目は、平安時代の遺品に多く、手擦れのために判別しがたいが、当初は現在よりも突出が強かったものと思われる。脇鉗の外形が描く弧線は、比較的穏やかな円弧を描いているが、先端部分はやや牛角状に近くなり鎌倉時代の特徴が伺える。この脇鉗と類似する作例に、奈良・室生寺(図9)の金銅五鉗杵があり、これは鎌倉時代末期の製作である。また、把部と鉗部の長さほぼ同じであり、これも中世以前の作例に多い。

埋金の痕跡が見られることは、ここに仏舍利を奉籠し、その後これを塞ぐために埋金した可能性が高い。法具類に仏舍利を奉籠することは、唐より帰朝した際の空海が提出した『御請来目録』にも見えており、事実、その空海請来品に比定される東寺伝存の五鉗杵には埋金の跡が認められる。したがって、埋金が認められる本杵も同様の趣旨の

もとに製作されたものと考えられよう。

なお、実際に金剛杵に埋金の痕跡が見られる例として、前述した京都・東寺五鈷杵のほか、最近では鎌倉時代の製作である奈良・龍泉寺の五鈷杵が紹介されているが、その数は非常に少ない。高野山膝下の慈尊院には、請求法具を基準にした法具がかつて存在した可能性は十分高く、本品もそれらの法具の有り様を踏襲したとみてよいであろう。



図7 金銅五鈷杵 慈尊院



図8 図7の部分



図9 金銅五鈷杵 奈良・室生寺 鎌倉時代

が重要である。

③金銅種子五鈷鈴 一口 高 一六・九

鈴身部と杵部を別鑄し、鍍金を施した金銅製の五鈷鈴で、鈴身部に梵字を陽鑄するところから「種子鈴」に分類される(図10)。

把部四方に楕円形二重輪の鬼目を配し、その上下を間弁付き単弁八

諸所に比較的古様を留めているとはいえず、蓮弁帯を締める約条が二本であることなど鎌倉時代の特徴も見えており、中世に古式五鈷杵を写した作例と考えておきたい。

寛保三年(一七四三)の『慈尊院弥勒菩薩略縁起』<sup>3)</sup>には、この五鈷杵についての記載があり、納入の仏舍利について、空海の師である恵果阿闍梨との関連を示唆しているが、その真偽についてははともかくとしても、やはり空海と関連の深い本寺であるからこそ、このような伝承が何時しか付加されたものとみられる。いずれにせよ伝承であっても空海の請求目録に見られる仏舍利納入法具の事績が残されているところ



図11 図10の部分

の先端に蕊を毛彫りし、さらに子持ち紐帯を廻らす。

側面の中央には金剛界五仏（バン・ウーン・タラク・キリク・アク）を象徴する梵字（図11）を、時計回りに五方に表す種子帯を設け、その上下に二本の紐と子持ち紐帯を廻らす。円相内に籠めた種子

図10 金銅種子五鈷鈴  
慈尊院

葉の蓮弁帯を飾り二本の紐で締める。蓮弁帯の両端には蕊が毛彫りされたと考えられるが、手擦れによる摩耗のため確認することができない。鈷部は中鈷に匙面を取らず、脇鈷は下方に嚙形を付す。鈴身は、笠からわずかに外に開きつつ側面を形成し、裾で外に広がる。笠には花弁の中央に鑄を立てた間弁付き単弁八葉の蓮弁帯を廻らし、弁

は、各々蓮華座に奉安し、周縁に小刻み線を入れて火焰を表す。

把部に比べて鈷部をやや大きく作り、鬼目は突出が強い。脇鈷の描く弧線は、基部から穏やかに広がって古様を示すが、先端はやや牛角形に近くなる。また把部を飾る単弁の蓮弁帯や紐二本から成る紐帯を見ると、制作は鎌倉時代に降ることは明らかであるが、総じて手擦れが著しく細部の表現が損なわれているのが惜しまれる。鈴身は裾部で急激に外に広がらず、緩やかな開きであるところは、岐阜・華嚴寺の種子五鈷鈴などに類似している。しかし、笠部の頂きに二段の大きな凹形の座を設けることや、長さの短い蓮弁の形状などには、さらに時代が降るかとも思える要素が見える。

なお、鈴身笠部の蓮弁帯は、把部のそれに比べて花卉の先が反り、中央に鑄を立てるなど相違しており、また鈴杵の接続部分に不自然さが認められるところから、鈴身部と杵部は、別時代のものを組み合わせたとも思われ、今後は材質分析なども行つて考究すべきと考える。ここでは、形式より判断して杵部を鎌倉時代、鈴身部は室町時代のものと考えておきたい。鈴内には別鑄の露玉形の舌を吊るすが、長年の使用のため形が崩れており、制作時期は明らかにし難い。

#### ④金銅三鈷鈴 一口 高 十八・七

銅鑄造による三鈷鈴で、日本製の法具とは異質の形式・意匠で、大陸より将来された遺品と考えられる（図12）。他の法具と同様、総体に摩耗が激しく、細部意匠がはっきりしない。確認できる範囲で記す



図13 図12の部分



図12 金銅三鈷鈴 慈尊院

と、素文の把の上辺に正面向きの人面(図13)を表し、その上に上部が連結した薄い板状の三鈷を付けている。鈴身は、下方に縦横線を刻んで格子状に作り、その下に紐を廻らす。  
鈷が三方にわかれているので三鈷鈴としてよいが、このように鈷部が明確に表されないこの種の金剛鈴は、従来元々明時代の製作とされ

ており、金峯山寺と

仁和寺の三鈷鈴がよく知られている。そ

の他の類似品では愛

媛・石手寺の三鈷鈴

(図14)と、慈覚大

師(円仁)請来の伝

承を持つ延暦寺の勅封唐櫃納入宝物中の三鈷鈴がある。細部に差異はあるが、前記の類似作例と本品は、ほぼ同時代の製作と考えられ、特に石手寺のものが本鈴とよく似ている。この種の金剛鈴は早くから日本に伝来したらしいが、現存するものは少なく、本品も希少な作例の一つに挙げられるであろう。請来に関する事情は、全く知る術がないが、こうした法具の存在も、空海と密接に関わる慈尊院の由緒を裏付けるものである。

#### ⑤金銅飲食器 二口

銅鑄造鍍金による飲食器(図15)で、二口が現存するが、これに付属する火舎・六器・花瓶は現存しない。二口ともほぼ同形式である。先に五鈷杵の記述で示した寛保三年の『慈尊院弥勒略縁起』では、このうちの一口の内部には空海の母公の歯が入っているという伝承を載せており、事実傾けると音がする。

皿部とこれを支える台脚部よりなる。皿部は丈高で、側面は素文。台

図14 金銅三鈷鈴  
愛媛・石手寺



図15 金銅飲食器 (左が母公の「齒」を奉籠したと伝える)

脚部は、側面に間弁付き重弁の蓮弁帯を廻らし、連珠文帯で締める。蓮弁は鑄を立て、先端に蕊を線刻する。基部には複弁の蓮弁帯を廻らし座とする。

器形は、脚部が丈高になる近世的要素はなく、比較的古様を呈する。脚部に蓮弁帯を飾り、連珠文帯で締める遺品は少なく、わずかに鎌倉時代の製作とされる、奈良・玉林善太郎氏旧蔵の金銅蓮弁飾飲食器が知られている程度である。基部の複弁蓮弁帯の先端が強く反るところも他例になく特徴的であるが、同趣の蓮弁は鎌倉時代後半の奈良・西大寺の金銅火炎宝珠型舍利容器的脚部に見られる。西大寺の舍利容器には建武二年(一一三三)の銘があり、したがって本品も鎌倉時代末期を中心とする頃に製作年代を比定することが可能となろう。

## 第二章 慈尊院の歴史と法具類の位置づけ

慈尊院については、『和歌山県指定文化財慈尊院多宝塔修理報告書』<sup>4</sup>に詳細な記述がある。次に同書の記述に導かれながら歴史を概観し、今回調査を行った密教法具の歴史的な位置づけを考察しておきたい。

慈尊院は創立時期が不明であるが、十九世紀に編纂された『紀伊統風土記』と寛文元年(一〇〇四)の『金剛峯寺奉状』、寛文十二年(一六七二)の『高野山通念集』からその創立と機能が伺える。一部は近世史料であるから、全てに信憑性を求めるのは困難であることを念頭に置きながら、慈尊院の創立の背景や大まかな歴史の流れを見ておきたい。

まず、弘仁七年(八一六)に空海が嵯峨天皇より高野山を拝領して山上に伽藍を造営する際、冬期には酷暑を避けて高野山山麓の家田村(又は、掩多村)に住んだこと、そこに伽藍造営のための政所を設け、経文や仏具などを収める倉庫を建てたこと、そこを政所又は下院と呼んだことなどの記載が見られる。政所の創立もこの頃と考えられる。また『高野春秋』によると、天長三年(八二六)には慈尊院で大仁王会が催されたとあり、これは後に高野山金堂で行われる大仁王会の起本となった。

『扶桑略記』によると、治安三年(一一〇三)の藤原道長の高野山参詣においては、政所を高野山登山の拠点としたことが知られ、次に承承三年(一一〇四)には、道長の子頼通が高野山参詣の際に、政



所河北の地を寄進している。

「慈尊院」の名称が史料に確認される最も早い年代は、『高野御幸記』の天治元年（一一二四）と考えられ、ここには鳥羽上皇の高野参詣の様子が記されている。平安時代中期以降の高野山は貴族などの寄進を伴う参詣の増加によって寺務が膨大となったことから、政所の機能を分けて山下の政所は山上の政所の所属機関と位置づけられたようである。

『高野山住僧等愁案状』（『又、統宝簡集』）や『高野春秋』によると、承安元年（一一七二）に慈尊院を含む政所は放火により焼失し、同三年（一一七三）に再興されたようだが、「焼二却―大師已来之什物」との記載から慈尊院開創以来の資財類が焼失したことが伺える。その後、鎌倉から南北朝時代にかけて慈尊院の歴史を明らかにする史料はなく、文献からは寺の様子は伺い知れない。

なお、元徳・元弘年間の『高野山文書』には、高野山衆徒供料の山下分の内訳に、「慈尊院三昧六人各二口」、「神通寺供僧各一口」とある。神通寺の創祀は不明だが、『続紀伊風土記』から、十四世紀前半には、弥勒安置の壇である慈氏寺と明神勧請の壇である神通寺の両壇を合わせた総称を慈尊院とするようになったことがわかる。

室町期については、『高野春秋』によると、文明十年（一四七八）に信州の妙音尼が慈尊院を訪れ紀ノ川の氾濫を予知し、資材を投じて神通寺の山裾へ伽藍を移すとある。天文九年（一五四〇）に洪水によって伽藍の大半が流されるが、天文十年（一五四一）に伽藍が再興し、

以後現在の地にある、

また、『統宝簡集』によると、伽藍を移した地は、元々慈尊院の倉庫の跡地だったようである。

安土桃山時代から江戸時代については、『高野春秋』や『中橋家文書』に「慈尊院弥勒堂上葺供養」という記述が頻出し、約二十年毎に屋根替えを行っている。近代は、明治六年（一九六三）に慈尊院が本山金剛峯寺に宛てた請願書から、明治維新以前は高野山の一院として、維新以後は慈尊院単独での寺院経営がなされていたことがわかる。

さて前述したように、本調査で取り上げた法具は、ほとんどが鎌倉時代から室町時代にかけての製作と考えられ、その点でこれらの法具類は史料の欠を埋める重要な資料といえよう。特にこれらの法具類の中には、一般的にはあまり普及していない特色を具えたものがあり、独鈷杵や種子五鈷鈴の伝来は、この地で特殊な密教修法が行われたことを暗示させる。つまりそれは中世にこの地域で、慈尊院が極めて有力な真言寺院として存在したことの証になりうるのではないだろうか。

また、五鈷杵や飲食器は、すでに江戸時代の『慈尊院弥勒仏略縁起』に記載があることによって、すでに近世にここに存在していたこと、当時において特別な法具であったことが伺い知れる。弘法大師や母公に因むそれらの伝承は、もちろん慈尊院創立の歴史をもとにしたものであるが、五鈷杵には空海請来品を継承する仏舍利埋納の痕跡が認められ、しかもその形式も古様であるなど、たんに伝説が付与されるばかりでなく、形式・意匠もまたそれを裏付けるような配慮がなされて

いることは注目されてよいであろう。また高野山と密接な関係を有していたことは、三鈷鈴のような、希少な請来法具が伝存することにも伺える。

### まとめ

本稿では、和歌山・慈尊院に伝存する五件の密教法具の調査をもとに、その概要報告を記したうえで、いくつかの考察を行い、それらの法具が一般にはあまり普及していない特徴的な形式を有する遺品や、弘法大師や大師の母公に関係する遺品で占められること、またそのことを記す縁起等の存在から、これらの法具が近世には慈尊院の重要な什宝となっていたことを明らかにした。

今後は、鬼面・鬼目式独鈷杵のもつ密教的意義や種子鈴が用いられる修法など、法具の用いられる「場」の考究を進めて行きたい。

### 注

- (1) 岡崎讓治「種字鈴考 金剛界鈴と胎藏界鈴」『仏教芸術』第七一号 一九六九年
- (2) 関根俊一「金鉦考」『日本文化史研究』第三四号 二〇〇三年
- (3) 寛保三年の「慈尊院弥勒菩薩略縁起」には、  
「一五鈷杵  
是は大師御入唐の時青龍寺恵果  
和尚より御譲りの佛具也しかるに大師

加持力をしてつて仏舍利を封じこめ  
給ひ重罪の人にはこの音を聞すまじき  
との御誓ひなり

#### 一佛器

此内一ツは弥勒菩薩加持し給ふて曰く女人は  
かならず高野山へ登り度執心を残すべからず  
この所女人の高野なりとて御歯を加持し  
こめ給ふなり

と記載がある。(一部、平易な表現に改めた)

- (4) 日本伝統建築技術保存会設計事務所「和歌山県指定文化財慈尊院多宝塔  
修理報告書」二〇一二年

#### 【慈尊院密教法具法量一覽】

- ①金銅独鈷杵  
長 二二・八 cm 把長 九・一 cm 鈷長 六・九 cm  
鬼面部径 二・八 cm
- ②金銅五鈷杵  
長 十六・五 cm 把長 五・六 cm 鈷長 五・六 cm  
鈷張 四・六 cm
- ③金銅種子五鈷鈴  
總高 十六・九 cm 鈴高 七・一 cm 口径 七・一 cm
- ④金銅三鈷鈴  
總高 一八・七 cm 鈴高 六・〇 cm 口径 六・六 cm
- ⑤飲食器 (その一) 總高 七・一 cm 口径 九・〇 cm 底経 七・三 cm  
(その二・「齒」奉籠) 總高 七・〇 cm 口径 九・〇 cm 底経 七・五 cm

【付記】 慈尊院での調査は平成二十九年七月二十四日に行った。調査に際しては、慈尊院御住職安念清邦師に格別の御高配を賜った。また調査は奈良大学教授関根俊一先生を中心に奈良大学大学院平出実乃里氏・岸本あすか氏とともに行った。本稿執筆に際しては先生より細部にわたり御指導・御助言を頂いた。末尾ながら記して謝意を表します。

図版出典

- 図 1・7・8・10・11・12・13・15 調査時に撮影  
 図 2 『密教法具（別冊増補編）』（臨川書店 一九九三年）第八十一図  
 図 3 図 2 と同書 第一五五図  
 図 4 『密教法具』（臨川書店 一九九三年）第二六図  
 図 5 図 4 と同書 第十六図  
 図 6 『密教法具（別冊増補版）』（臨川書店 一九九三年）第九一図  
 図 9 図 2 と同書 第二〇七図  
 図 14 石手寺のホームページより転載